

ミンガラータウンニュー町の異教建築

山形洋一

「ミンガラータウンニュー」。カタカナでも長いが、単音節の基本語彙で構成されるビルマ語で、5音節はいかにも長い。それもそのはず、最初の3音節（ミン・ガ・ラー）は「火星、吉祥」を意味するサンスクリットの「マンガラ」に由来するのだ。タウンは「山、森」、ニューは「若葉、若芽」の意。あわせて「新福岡」というような意味だろうか。ここではヤンゴン市役所の略記法にしたがい、MTNTと略すことにする。

南の川港を中心に発達したヤンゴンの下町（商業区）を、南北に走る街路は、西端の1番から東端の74番までの番号で呼ばれている。番号は13の欠番（東端のモンキー岬のために用意されたのだろうか）のあと、鉄道の北側に移り、これも西から東に87番から130番まで振られている。そこがMTNT町の中心部で、8階建てのアパートが立ち並び、一階は商店や町工場が目立つ。平方キロメートルあたり平均2万4千人と、下町5町をのぞいて4位という人口密度の高さ。住民の大半は南アジア系なので、宗教対立があるときには、緊張が走る。

町の南は鉄道、西はダゴンの軍関係施設、北はカンドージー（大沼）、東は操車場と、無人地帯や過疎地に囲まれたMTNTの市街地は、もともとあまり住みやすい場所ではなかった。「カンドーガレー」（小沼）と呼ばれた湿地帯に、市の共同洗濯場が設けられ、今でもDobe Streetという小さな街路名が残されている。洗濯人カーストを表すヒンディー語のドービーに由来し、かつてもっとも不潔な土地と記録されている。近くには赤レンガの貧民用の養老院も残っている。



図1 スンニ派の墓地

湿地から湧き出る瘴気（汚れた空気）が原因で、マラリアその他疫病（瘴癘）が起こると信じられていた19世紀、富裕なヨーロッパ人や中国人がこのけがれの地を敬遠したのは当然だ。

自然に吹き溜ってきたのは、「現地

人」と南東インド系のクーリー（苦力、肉体労働者）だった。

町の東にはビルマ人（広義）や中国人の墓地もあったようだが、今に残るのはポー・ミン・ヤウン通りを挟む2か所の musulim の墓地と、ユダヤ墓地だけである。

道の北側にある「ムガル・シーア派」ムスリム墓地（1856年創設）の門には鍵がかかっているが、柵ごしに中を覗くと、白大理石の墓石が見え、右上から左下に流れ落ちるウルドゥー文字の陰刻が流麗だ。ペルシャの行政システムや宮廷文化を模範とした、インド・ムガル帝国が滅亡し、その最後の皇帝につき従って流亡してきた人たちが葬られているのだろう。

同じ通りの南側にあるスンニ派の墓地（1862年創設、図1）には、卒塔婆を分厚くしたような木の墓標が並び、コンクリートで囲った盛り土にはキャッサバが一本ずつ植えてある（図1）。インドでは見たことのない習俗だが、どこに起源をもつのだろう。



図2 チッタゴン系スンニ派モスク

墓の向こうには、テインピュー通りの陸橋脇に立つ、スンニ派モスクが遠望される。金色の玉ねぎ型ドームを乗せたサーモンピンクのデコレーションケーキのような建物だ。ビルマ語とウルドゥー語で書かれた表示によれば、チッタゴン地方の出身者が建てたそう（図2）。

これが建立された1911年、バングラデシュ（1971年独立）はおろか、パキスタン（1947年独立）もこの世になかった。当時はパスポートがなくても、チッタゴンとヤンゴンの間を行き来できたのだと、近くで印刷工場を経営する老人が語る。「何せ同じ『インド帝国』の中だったもんね」。自らを「バングラデシュ人」と呼ぶことには、ためらいやこだわりがあるようだ。

チッタゴンは日本軍が一時期占領したこともあり、ここに住みついた人たちもまた、我々とまったく無縁ではない。

MTNT 町にはヒンドゥー教の寺もいくつかあるが省略し、かわりにキリスト教会を紹介しよう。いずれも広義の「インド人」と縁が深いようだ。

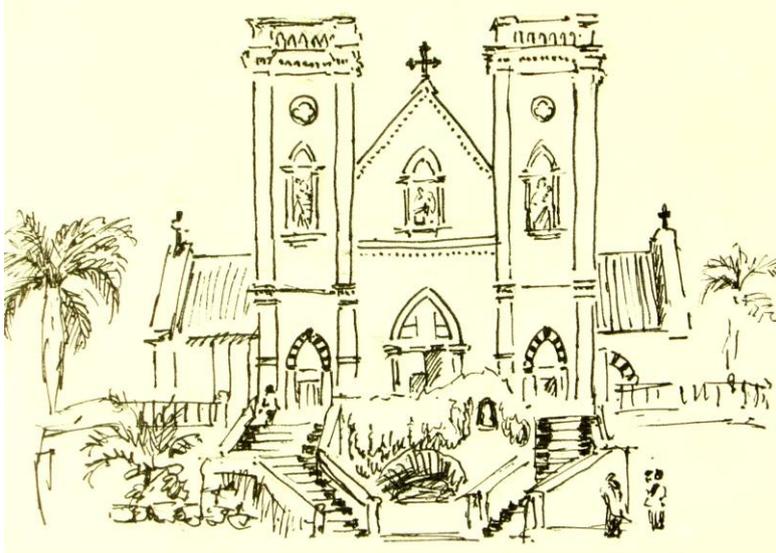


図 3 聖アンソニー・カトリック教会

ため、ヒンドゥー教寺院から締め出されて、キリスト教に改宗したのだろう。ミャンマーにおける初期カトリック教会にとって、タミル系貧民の魂の救済は、カレン族の勧誘と並んで、重要なミッションとなった。

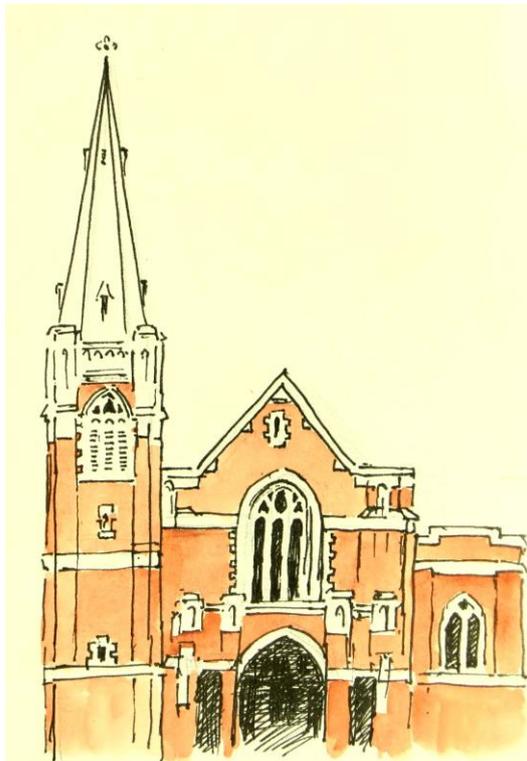


図 4 メソジスト教会

ヤンゴン中央駅北東のカトリック・聖アンソニー教会の表示は英語、ビルマ語、タミル語で書かれ、敷地には蓮の花をかたどったインド風の吉祥模様が描かれ、ロンジー姿に混じってサリー姿も見られる(図3)。

タミル語を話すのは、かつてインド東部のマドラス(現チェンナイ)港から流れ着いた「クーリー」たちの末裔で、カーストが低い

それにしても、なんと大きな犠牲であったことか。2年以上勤めあげた宣教師は稀で、おおかた現地で倒れるか、送還の船の中、あるいは本国について間もなく死んでいる。体力と運に恵まれ、信仰心の厚いわずかな人たちが、先達の屍を乗り越えて信者の確保に努めた。そうして年々増える信者たちは、狭い教会の床に座ってミサに臨んだそうだ。

フランス人神父 La Rouvereur は、体力とリーダーシップに恵まれた数少ない聖職者の一人だった。彼が植民地政府にかけあつて得た教会建設用地は、墓地と湿地と荒蕪地ばかりのMTNTの一角だった。1874年から3年がかりの教会建設には、タミル系クーリー、坑夫、その他の労働者が勤労奉仕をしたという。日銭で暮らす彼らによる無料奉仕とは、ただ事ではな

い。そうでもしなければささくれ立つ心のありようが偲ばれる。今の建物が当時のままかどうかは不明だが、先祖が汗を流して建てた教会に通う人たちの気持ちを思うと、うらやましさを禁じ得ない。

すぐそばに建つ赤レンガの建物は、現在公立高等学校となっているが、元は教会付属の学校（セミナリオ？）だったのだろう。信者たちの約半数を占めるミャンマー人の中にも、この学校の出身者やその親たちが多いのだろうと想像される。

聖アンソニー教会のすぐ西、アーランピャー・パゴダ通りとジョーピュー（旧ビクトリア）通りに挟まれた小さな丘の上には、メソジスト教会が立っている。となりの映画館の看板に押されて目立たないが、赤レンガと白壁をバランスよく配した大学ゴシック様式は、日本人の目にも懐かしい（図4）。

懐かしいと言えば、そのすこし北東にあるルーテル派ベツレヘム教会（1878年）もまた、ちょっと気取った町の教会のようで、親しみやすい。ここでもタミル語、テルグ語（アーンドラ・プラデーシュ州の公用語）で礼拝が行われているそうだ（図5）。

19世紀は、キリスト教会が欧米を中心に社会改革の先頭に立った時期で、その精神が、これらの教会の生真面目なデザインにも見て取れる。

MTNT は観光ガイドブックでは取り上げられない、地味で猥雑な町だが、よく見ると帝国経営の遺産がややいびつな形で残されていて、興味が尽きない。ボージョー・アウンサン・マーケットの裏に淀むエキゾチシズム、とでも言おうか。故郷を捨てた人たちの、宗教を核としたコミュニティーの姿を、美しいと見るか、恐ろしいと見るか、見る人によってさまざまだろう。

（了）

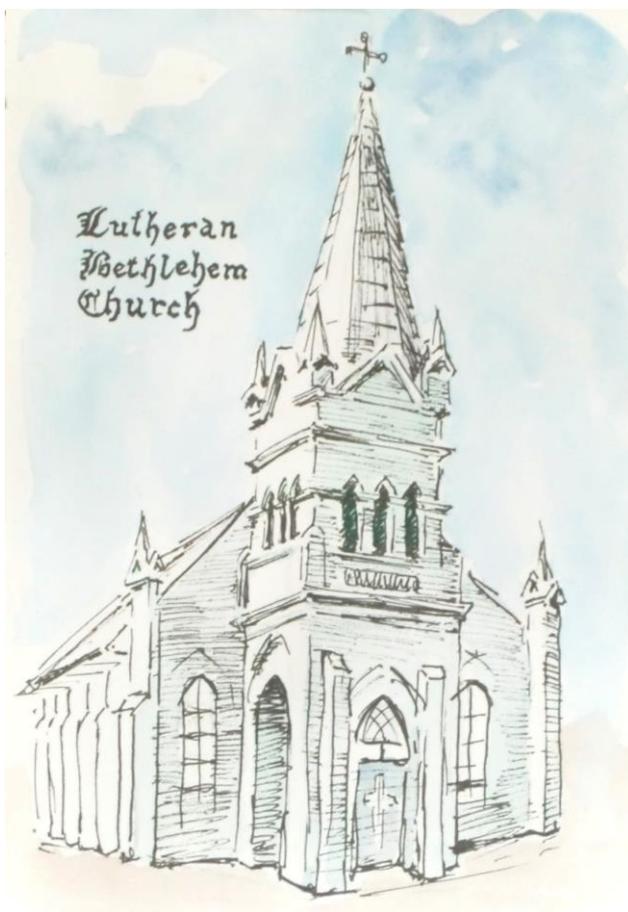


図5 ルーテル派ベツレヘム教会